昭和39年８月27日第３種郵便物認可　（旬刊・毎月１、11、21日３回発行）　© 京都自動車新聞社 2023年　購読料（６カ月）11,000円（税込み）

2023年（令和５年）
12月11日月曜日
第1933号

京都自動車新聞

京ト協伏見支部 ４年ぶり歩こう会 2
京整振が２月６日に女性セミナー 5
京都ダイハツ 京の輪マルシェー周年 6
ＫＣＡＡ京都 11、12月も健闘続く 8
◀TMP京都 機械・工具フェア開催 7

発行所　京都自動車新聞社　京都市伏見区竹田向代町 51-5（京都自動車会館内）　電話（075）672-0552　ファクス（075）682-0205　メール　access@kyotojidosha-np.jp

ディーラー新時代 ②

いすゞ近畿綾部営業所 & UDトラックス綾部カスタマーセンター

初の協業拠点 順調な滑り出し

融合によるシナジー 予想超える効果

いすゞ自動車とUDトラックス（丸山浩二社長、埼玉県上尾市）が綾部市に設立した初の協業拠点。いすゞは、グループの販売会社、いすゞ自動車近畿（前田和男社長、大阪府守口市）の営業所およびサービスセンターとして運営し、UDトラックスは京都府北部の新たなカスタマーセンターと位置付ける。開設から3カ月。両社は「1日の平均入庫台数は当初見込みを上回っている」と順調な滑り出しをみせる。

「協業の試金石、今後のモデル拠点」。いすゞ近畿の森田直武常務は新拠点の意義をそう強調する。従来施設は老朽化や設備面の拡充を目的にリフレッシュ計画はあったものの、具体的な時期は未定だった。しかし、国道27号の拡幅整備がはやまったほか、綾部市周辺には大型トラックを保有する顧客が多くニーズに応えるべく、2年前の2021年に移転計画がスタートした。

新拠点は、従来に比べ敷地面積が2倍、建屋は1・3倍に拡大。「メンテナンスによるタイムロスをなるべく避け、『顧客の稼働を支える』という観点から入庫ボリュームを考えた。併せてそのための体制づくりにも努めている」（森田常務）。

一方、UDトラックスでは以前、京都北部地域に営業所を置いていた時期があったが、現在は閉鎖し、整備等は協力会社に依頼。カスタマーサービスのさらなる強化には同地域での拠点設置が検討課題の一つだった。そのような中、いすゞ近畿の綾部拠点リニューアルが動き出しており、協業拠点開設に向けた動きは自然な流れともいえる。

両ブランドのロゴが並ぶ

2ブランド対応 メリット大きく

新拠点は、両社の車両に対応する必要があるため、建設にあたりストール数を重視、総ストール数は九つ整備。アクセスも京都縦貫自動車道の綾部安国寺インターチェンジ（IC）から近く、京都縦貫道と綾部ジャンクション（JC）で結ばれる舞鶴若狭自動車道から乗り入れでき、メリットが高い。実際、「通過車両が立ち寄るケースが増えている。両ブランドを保有するユーザーからは、1カ所で完結すると喜ばれている」（UDトラックス近畿地域京滋支社・小石原英夫支社長）。

モデル拠点として今後のカギを握る

UDトラックスは、ケースバイケースではあるものの、京都府久御山町のカスタマーセンターで北部をカバーしてきた。綾部市に拠点を置くことでユーザーからの距離的課題をクリアしただけでなく、「ディーラーならではの高度な技術、最新設備、トラックの電子化対応といった『安心感』が受け入れられた」と分析。「（協業の）相乗効果は想定以上」と手応えを感じている。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

今後も幅広い顧客の「稼働支える」

違う企業文化の人材が一緒に働くのは社風の違いからギクシャクしがちだが、いすゞ近畿の森田常務は「日を追うごとになじみ、オープンな関係が築けた。『顧客の稼働を支える』という同じ方向を見ていたことも大きい」と強調。今後の展開には「安全を第一に、さらなる顧客の安心と信頼を高めていく」を掲げる。

森田常務は「融合による対応能力の高まりでさらなる高品質サービスの提供が可能になった。そのことで安心、信頼が高まり、エンドユーザーからの高評価につながってる」と稼働3カ月を総括。全国初の協業拠点として注目される中、当初想定より早いシナジー効果を生んだ理由をそう分析する。「これからも幅広い顧客の稼働を支えるべく、しっかり業界に地域に根を張っていきたい」。

メーカー、販売会社、エンドユーザーが期待していた国内2ブランドの融合により生まれるシナジー。稼働から3カ月経過した協業拠点は想定を超える便利さで順調に船出し、予想以上の効果を生み出している。

＊「追跡データベース―東京商工リサーチ編―」休みました。

次号は休ませていただきます。1月1日号から通常通り発行致します。

京都自動車新聞社

窓の外には由良川が展望できる

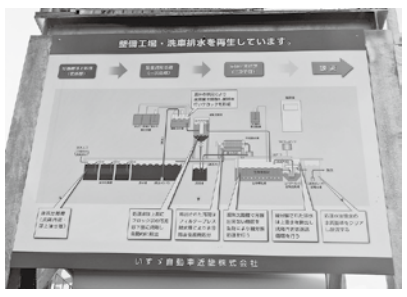
働くスタッフと地域社会に優しい施設

事務所2階に設けられたメカニックスタッフの休憩施設はソファーに加え、畳敷きスペースも確保。大きく取られた窓の向こうには由良川が展望でき、作業で疲れたスタッフに癒やしをもたらすつくりとなっている。

作業場の各ストールには夏場なら冷風、冬場は温風が出る空調機を完備した。メカニックスタッフが外気温でストレスを感じないよう配慮したものだ。「一昔前なら夏日でも辛抱して働くという風潮だったが、現在は入社した社員が働きやすい環境を提供し、きちんと育成することが求められる」。

いすゞ近畿では他拠点にも同様の空調設備を拡大しており、今夏導入した京都支店（京都市南区）ではメカニックスタッフが心待ちにしていたという。

新拠点はメカニックスタッフが12人、営業4人、所長など含め計27人で運営。入庫台数が増える中、Uターンや地元採用中心に、外国人留学生も視野に入れつつ採用を強化し、サービス体制拡充を図る考えだ。



また、太陽光パネルを採用したほか、全電燈をLED（発光ダイオード）化。整備工場・洗車排水はバイオ式工場排水処理を施すことで環境面にも気を配っており、地域社会にも優しい拠点として地元振興に努めている。